

●日本海中の一島嶼(ヤンコ) 去る四月中旬東京發行の各新聞紙は日本海中に一島嶼を發見せることを報せり、其いふ所に従へば韓國鬱陵島を東南に去ること三十里我日本國隱岐を西北に距ること殆んど同里數の海上に未だ世人に知られざる一島嶼を發見せり、該島は未だ本邦の海圖には載らずイギリスの海圖にも亦之を記せざれども其島の存在は確實にして、現に鬱陵島にありし日本人は晴天の日山の高所より東南を望みたるに遙に島影を認めたりといへり、今此の島發見の歴史を聞くに一兩年前九州邊の一潜水器船が魚族を追ふて遠く海中に出てたるに、見慣れざる所に一島嶼の存在せることを發見し喜んで之を根據地と定め其四隣の海中を漁り回りたるに、此の邊魚族の棲息せるもの頗る多かりしも海馬數百群を爲して潜水器船を沮みたれば終に目的を終へずして引還したりといふ、此の船中にありし潜水業者の實見したる所なりとて報する所によれば其島は長さ三十町に近く丘陵甚た高からざれども處々に蕪菁藻類、島形又極めて屈曲に富み漁船

報

を泊し風浪を避くるに最も便あり、只地上より數尺の間は之を鑽るも水を得ず従て現今の所にては水産物製造場としての價値は乏しいといふべし、故に學者實業家は猶充分なる探檢を施すの餘地を留む、日韓漁民之を指してヤンコと呼へりといふ

以上の記事に據るに其位置固より確實ならず、想ふに此の島は未だ海圖に示されずといふも其記事及び稱呼より之を察せば恰も「Liancourt rocks」に符合せり、或は之を指すに非ずやと疑はるゝも尙其精確なる斷定は精細なる報告を得たる後に非れば下す能はず、且らく參照の爲めに左に朝鮮水路誌第二版(明治三十二年水路部刊行)二六三頁よりリアンコート島に關する記事を抄録せん

リアンコート列岩

此列岩は洋紀一八四九年佛國船「Liancourt」初て發見し稱呼を其船名に取る其後一八五四年露國「フレガット」形艦「Pallas」は此列岩を「Menalai」及「Olivusse」列岩と名つけ一八五五年英艦「Hornet」は此の列岩を探檢して「ホルネット」列島と名つけり該艦長「Forsyth」

の言に據れば此列岩は北緯三七度一分四角東經一三二度五五分の處に位する二座の不毛嶼にして鳥糞常に嶼上に堆積し嶼色爲めに白し而して北西イ西至南東イ東の長さ約一里二嶼の間距離約二銖半にして見たる所一礁脈ありて之を連結す●西嶼は海面上高さ約四一〇呎にして其形棒糖の如し東嶼は較低くして平頂なり●此列岩附近は水頗深きか如しと雖其位置は實に函館に向て日本海を航行する船舶の直道に當れるを以て頗危険なりとす

●新島發見(米領となる) アメリカの艦裝會社に屬する船ノルウエーの船長 Sægegaard 氏は大太平洋上に吾人の未だ知らざる一新島を發見せり、船長はシドニーよりマニラへ航行中海圖上に見へざる山がちの一島嶼を發見して其位置を測定し發見の旨を米國政府に急報せり、米國は砲艦を派して之を臨檢せしめ遂に國旗を樹たり、此の島は北緯二度四分東經百三十五度三十五分に位しフキリツピン群島とカロリン群島との間にありて森林を以て被はれ地味肥沃なるが如し、島の名は

發見者の名に因みサクセガードと命名せりといふ

●フキリツピン群島の地震 マニラ觀象臺の Jose Coronas 氏は此程一八九七年に於けるフキリツピン群島の地震に關する重要な報告を公にせり、同年の地震回数三百七回にして之を百八部に分別するを得、群島至る所として震動せざる地なく而して Mindoro Paragua 二郡并に呂宋島の中央部にては五回以下なるも Samar の北東にては百回以上に達し、屢々強震を感せり、其報文には殊に三の重なる地震につき完全なる記事あり、即ち八月十五日の呂宋、九月二十一日の Zamboanga 十月十九日二十日のサマーに於ける地震なり、又四ヶの地震は相距る一萬一千呎の Shide 等 Edinbourg の兩所にて觀測せられ、又サムボアングにて觀測せる二ヶの地震の震波平均速度八呎七、と八呎一となりしといふ、

●フキリツピン群島沿岸貿易港の開港

マニラ駐在の帝國領事の報告(四月)によれば呂宋島ノルソーゴン州マトノツグ港及びミンダナオ島ブツファ

明治二十六年二月十三日第三種郵便物認可

明治二十一年十二月十日内務省許可

毎月一冊十五頁發行

地學雜誌

明治三十四年五月
第十三輯第四百九卷

目

論 說

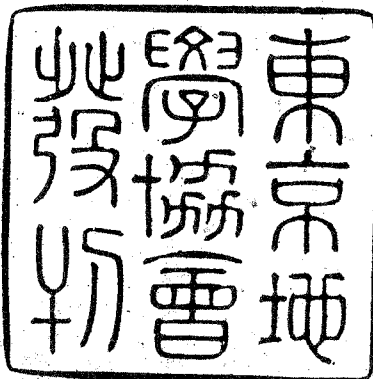
- 肥料用燐礦につきて……………農學博士 恒藤規 陸三三
- 鞍山金礦につきて……………理學士 石井八萬次郎 六一
- 澎湖島……………理學士 齋藤 讓 三九
- 水曜島の談……………佐藤虎次郎 六一

雜 録

- アリヤンニヤ號北大西洋深海探察……………猪間收三郎 二九三
- 第三回遠足會記事概要……………關野修藏 二九七
- 臺灣全島探察地形圖成る……………二九一—三〇〇

雜 報

- 東京地學協會記事 ●第二十二年總會 ●日本海中の一島嶼發見 ●大平洋上一新島發見(米領となる) ●フ井リッピン群島の地震 ●フ井リッピン群島沿岸貿易港の開始 ●セバスタアアンロホス島の不存在 ●瑞西大口調査 ●ウルミア湖 ●北極附近の氣温 ●トルコ新地圖 ●ルシアシ、コルチア、井ロ氏の訃音 ●セルバ、ピント氏亦逝矣
- アルバトロウス號中央太平洋探察記事……………三一—三六



東京地學協會活版所印刷

1991.5.